

中学校における電子情報ボードを用いた文法指導の実践

兵庫県立芦屋国際中等教育学校 教諭 岩見 理華

r-iwami@nifty.com

キーワード：中学校、英語、文法指導、電子情報ボード

1. 実践の目的

日本のように学習者が教室外で英語を使用する機会のない EFL (English as a Foreign Language) 環境では、文法指導は実践的コミュニケーション能力を育成するうえで「正確さ (accuracy)」を向上させる重要な役割を果たしている。しかしながら学習者の多くは教室で得た文法知識を実際の言語使用の場面で運用できず、その知識の定着も不十分であることが多い。これは文法知識が言語使用の際に使えない「静的な」ものとして捉えられ、実際のコミュニケーションの場面で利用される「動的な」知識として認識されてこなかったことが一因となっている。

従来の文法指導では、単一文法項目を扱い、パターンプラクティスの繰り返しを重んじるドリル活動や、あらかじめ例文が提示されている対話活動で専らその定着を図ることを目標としていた。

本実践の目的は、このような指導のありかたを捉えなおし、学習者に具体的な言語使用を意識させる指導を行うときに電子情報ボードを有効に利用することである。本稿では中学3年生の「現在完了形」の授業実践をとりあげる。

2. 実践の概要

Larsen-Freeman (2003) は、従来の「知識としての文法 (grammar)」を「動的な技能 (grammaring)」にする必要を説き、grammaring を育てるためには、「どのような言語形式を用いるのか (form)」、「それがどのような意味を持つのか (meaning)」、そして「いつ、そしてなぜそれを用いるのか (use)」という3つの側面を相互に関連させ、バランスよく指導する必要があると主張している。

本実践では、具体的な場面や状況に合った適切な言語形式・言語表現を学習者自身が考えて選び取り、コミュニケーションを図るような言語活動を最終目標活動としてデザインした。その活動にいたるまでの文法説明を「言語知識」とすると同時に、言語使用に必要な「動的な活動」すなわちグラマリングそのものと捉え、指導者と学習者、あるいは学習者同士のインタラクションの過程の中で、実際の言語使用を意識した説明を通して、特定の言語形態（目標文法項目である「現在完了形」）がいかなる場面で、どのような意味で用いられるのかを他の言語形態（既習文法項目の「過去形」）と比較しながら理解させていった。上記で得られた知識を基盤とし、ドリルの活動からペアやグループの対話活動により一層の定着を図ったあとは、現実場面をシミュレーション化した発話内容の自由度や創造性の高い活動（高島、2000；2005）に学習者を従事させ、活動そのものや他者からのフィードバックを通してより体系的な知識へと導くようにした。「気づきのないところに学習はない」(Schmidt, 1990)と言われていることから、本実践ではフィードバックによる学習者のさまざまな「(誤りに関する) 気づき」を大切に、学習者自らが目標（課題）を達成（解決）するための手段として英語を用い、相手との対話の中で関心を示したり、相槌を打ったり、聞きなおしたりするなどする「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」をも同時に育成することをねらっている。



3. 実践の特徴

本実践の特徴は、上記の文法説明と言語活動において電子情報ボードの機能（画像・動画・音声資料等教材の一体的提示、タッチペンを用いた板書機能）を最大限利用し、学習者とのインタラクションを通してダイナミックかつコミュニケーション指導を行うことにある。

従来の文法指導では、現在完了形は「継続」、「経験」、「完了／結果」などの副次的意味区分にそって文の理解を中心とした指導がなされている。本実践では、現在の話し手の気持ちと過去の出来事を結びつけながら今の気持ちを伝えるという「話し手の視点」と、現在完了形の本質的意味の指導に焦点をあて、文法説明とコミュニケーション活動のふりかえりに電子情報ボードを利用した。

4. 実践の展開

(1) 目標を明確に提示する

説明や活動を行うにあたっては、まず、授業の目標を明確に提示し、指導者と学習者たち間で共有を図っておく必要がある。プレゼンテーションソフトを用い、以下の2つの目標を提示した。①現在完了形の形、意味、使い方に

ついて理解する（過去形との違いがわかる）。②現在完了形を使って、身近な場面で、自分のことについて説明したり、相手にたずねたりすることができるようにする（過去形と使い分けられるようにする）。

(2) オーセンティックな教材の提示

目標文法項目である現在完了形を説明する際に、学校生活の中で撮影した静止画や動画を埋め込んで作成したスライドを用いた（図）。「過去形」と「現在完了形」の違いは話し手の気持ちが現在とつながりがある（＝現在完了形）か、ない（＝過去形）かである。スライドを作成したり、活動をデザインしたりするときには、学習者にとって身近な事柄でそれらの違いがはっきりわかるように工夫した。そしてそれらの教材を電子情報ボードのタッチパネルやペン機能を用いてダイナミックに提示した。

(3) 実際の場面で使う活動

文法説明で得た知識を実際の場면을シミュレーション化した場面で使ってみるコミュニケーション活動を行った。使用した活動は「タスク活動」（高島、2000；2005）と呼ばれ、与えられた場面で互いに異なる情報を持つペアが目標文法項目を使用してある課題（タスク）を解決

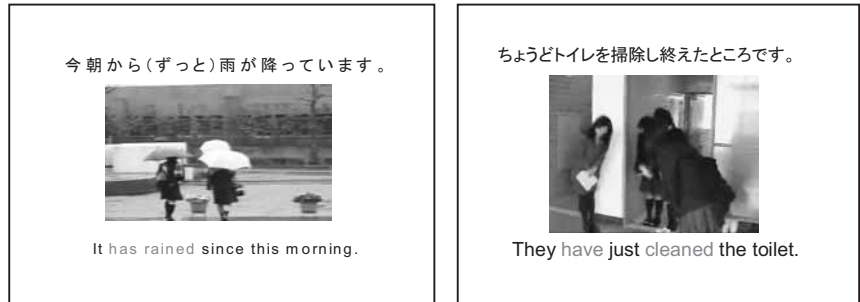


図 「現在完了形」を説明するスライド（例）

する対話活動である。作成したタスクは、来日したばかりのイギリス人男性と日本に滞在経験のあるアメリカ人女性の対話の中で、話し手が目標文法項目である現在完了形を用いて動作の継続や現在までの経験について話したり、既習文法項目である過去形を用いて過去の出来事について話したりする場面が組み込まれており、食事の待ち合わせの時間と場所が決まれば対話が完了するようにデザインされている。活動に必要なと思われる語彙や表現は Tool Box と名づけたスライドを作成し、活動中、電子情報ボードで提示しておいた。

(4) 「気づき」をうながすモデル提示

アメリカ人女性とイギリス人男性のALT 2名の協力を得て、タスク活動が英語母語話者によってどのように展開されるか実際に行ってもらい、モデル映像としてビデオに記録した。学習者が活動を行ったあと、電子情報ボードを使って、対話のスク립トを配布してモデル映像を提示したり、目標文法項目をハイライトした対話のスク립トと音声と一緒に聞かせる活動を行ったりして、学習者たちに自分たちの活動と比べさせた。これは学習者自らが、目標とされる知識と自分たちの知識とのギャップに気づき、自身で問題を解決できる場を設定することを意図している。

5. 電子情報ボード活用の効果と課題

前述のように、従来の教室における文法指導では、目標文法項目の形式の暗記の指導に重点が置かれ、その定着を図るためのドリル的な対話活動が主流であった。本実践では、オーセンティックな教材を電子情報ボードでダイナミックに提示し、指導者と学習者の対話によるコミュニケーション的な説明を行うことで、説明を聞く受動的な活動であっても、学習者たちが授業に主体的に参加する態度の変容が見られた。また、説明で得た文法知識を現実の場面を意識した場面で使ってみる活動には、楽しく生き生きと取り組む姿勢が見られた。学習者たちが自分にとって関わりの深い事柄について、想像力を働かせ、活動を行った結果何か新しい情報や成就感が得られることを通して、コミュニケーションに対する興味・関心が高まり、学習意欲も向上し、学習内容の理解と定着が促進されたことは、実践授業後に行った筆記テストや「ふりかえりシート」の記述からも明らかである。

これまで電子情報ボードを用いて文法指導を行った目標文法項目は「現在完了形」のほかに「現在進行形」、「過去進行形」、「未来形（will と be going to～）」、「比較級」、「受動態」、「分詞の後置修飾」がある。現在、作成したビデオクリップやプレゼンテーションスライド等の教材をラベリングして整理し、指導案やワークシートとともに校内サーバーに保存して、教員間で共有し、学習者の習熟度に応じて各担当者が再活用する方法について検討している。

参考文献

- Larsen-Freeman, D. (2003). *Teaching Language: From Grammar to Grammaring*. Boston, M.A: Thomson/Heinle.
- Schmidt, R. (1990). "The role of consciousness in second language learning." *Applied Linguistics*, 11.2. 129-158.
- 高島英幸（編著）(2000)『実践的コミュニケーションのための英語のタスク活動と文法指導』東京：大修館書店
- 高島英幸（編著）(2005)『文法項目別英語のタスク活動とタスクー34の実践と評価ー』東京：大修館書店